



義姉体験

恋人は兄嫁

巨道空二

挿絵 / 李KPA

リアルドリーム文庫 / PDF立ち読み版



Contents

目次

序章	憧れと距離……………	4
第一章	兄夫婦の亀裂……………	11
第二章	挑発のリビング……………	40
第三章	水の誘惑……………	89
第四章	彼女の初めて……………	131
第五章	告白の寝室……………	189
終章	兄の妻は僕の恋人……………	246

登場人物

Characters

矢来 涼香

(やらいすずか)

結婚五年目、28歳の美人奥様。もともと活発で誰にでも優しく、明るい性格。夫は出張が多く、家で留守を守っていることが多い。

矢来 真二

(やらいしんじ)

実家で両親とともに暮らしている、ごく普通の大学生。高校生の頃、兄の結婚相手として出会った涼香にずっと憧れている。

矢来 誠一

(やらいせいいち)

涼香の夫であり、真二の実兄。31歳。海外出張が多いエリート商社マン。

「散らかっているけど、座ってちょうだい。お茶を入れるわ」

「あ……はい」

促されるままにソファーに腰掛けた青年は、部屋の状態に目を丸くした。普段はしつかりと片付けてあるはずのリビングの一角が散らかり放題だったのだ。ガラステーブルやソファーベッドには様々なアイテムが広げられていた。

続き部屋になっているキッチンでは涼香が背中を向けてお茶を入れる支度をしている。視線を足元に移した青年は様々なアイテムの中から一枚の写真を取り上げた。

(昔の写真だ……結婚前の……)

山に行つたときの写真らしい。勇壮な滝をバックに兄と涼香が笑っている。水しぶきがカメラのレンズに付着したのか画面のそこかしこに滲みがある。それでも、そこに写る二人の笑顔は眩しいほどだ。

いくつもの写真を手に取ってみると、どれも兄と涼香の笑顔に彩られているものばかりだ。時には肩を組んで、また時にはカメラに向かってVサインをしていたりと様々な二人の姿がそこにあつた。

(なんだよ、これ。こんなの、広げていたのかよ、涼香さん……)

どの写真にも、兄がいた。誠一は真二とよく似た顔で笑っている。涼香はこんな写

真の数々をカーペットの上に並べていたのだった。

ガラステーブルの下の棚にタンブラーがひとつあつて、真二は先ほどの違和感の正体に気付いた。涼香はかすかだけれどお酒の臭いをさせていたのだ。タンブラーに残っている香り高い酒は、兄が大事にしていたブランドデーだ。

写真以外にも、いろいろなお土産物がカーペットやガラステーブルの上に広げられている。こんな思い出の品々を並べている兄嫁を想像すると胸の奥がふさがれてしまうような思いだった。

「お茶が入ったわよ」

写真に見入っている青年の背後から声がかげられた。お礼を言つて茶碗を受け取ると、人妻は口元を押さえて笑つてみせる。

「すごいね、こんなに写真があるんだ」

「うふふ。恥ずかしいところ、見られちゃったわね。本当はもつといっぱいあるのよ」
ソファアの一角には、アルバムの山。この中から選び出したものを床に並べていたのだ。彼女の視線を追うように写真を眺めていると、コトリと軽い音がした。お茶が入ったのだ。

顔を上げると、兄嫁が照れくさそうな顔をしていた。一見いつも通りだけれど、明

これ以上接近すると理性という箍で押さえ込んできたモノが爆発してしまいそうな気がするが、そうせずにいられなかったのだ。

それ以上何も言えずにいる兄嫁を胸に抱きしめたまま、真二は必死に心をそらそうと悪戦苦闘している。断じてこの前のようなことをするわけにはいかないのだ。彼女を悲しませ、苦しませるようなことはしたくなかった。

「な、なにか……あつたんでしょ？ 何があつたの？」

辛うじて絞り出した声は緊張と焦りで、意外なほどに細い声でしかなかった。力を込めて、少しでも頼りがいのある声にしたかった。そんな彼の胸元にしがみつくと人妻がしゃくりあげながら語る声は悲しいビブラートがかかっている。

「誠一さん……当分帰って来れないんだって。お仕事が……大変で……」

「……兄貴がいない間……なるべく、ぼくも顔を出すからさ。元氣だしてよ」

妻がそんな状態では兄も心配するだろうというのと、コクリと頷く様子がいじらしかった。ぎゅつと抱きしめると、おずおずと抱き返してくるのが愛おしい。

（涼香さん……こんなにつらそうなの……）

思い切り抱きしめてやれない自分もどかしい。できることなら、この腕の中に彼女を抱え込んで柔らかく凹凸に富んだ肢体を感じたい。彼女の涙を拭き取り、嗚咽す

る唇を自らの唇でふさいでしまいたかった。

「つらいときは……ぼくが……その、慰めてあげるからさ」

彼女が顔を上げた瞬間、青年の呼吸は止まっていた。涙に濡れた瞳の奥に、寂しさや悲しみだけではない何かがあつて、若者はそれに魅入られたかのように身じろぎもできずにいた。その時間はわずかなものだったろうけれど、彼女と目線が合ったこの瞬間はひどく長いものに思われたのだった。

「真二君……わたしを……慰めてくれるの……?」

その声は、細く細く、囁くような声だけれど、青年の耳にははっきりと聞こえてしまった。慰める。それは、彼女にとっては大きな意味を持たないのかもしれない。だが、今の若者にとってはあまりに大きな誘惑だった。

「ぼくは、義姉さんに泣いてほしくない……から」

よい香りのする髪に顔をうずめての、不器用な言葉。これが、今の青年にとって一杯の告白だったのかもしれない。

「馬鹿ね。わたしは……そんなに泣き虫じゃないわよ」

そんなはずはなかった。彼女が弱さを隠してきただけなのだ。よい香りのする髪に顔を埋め、耳元で囁くとビクン、と大きく女体が震えた。そのまま髪の毛をかき分け

て耳たぶをさぐりあてると柔らかい感触を唇で挟んでやる。

「あ、だめ……」

駄目という言葉とは裏腹に、人妻の腕は青年の背中を強く引きつける。それに力を得た男の唇は、耳たぶをより深く口に含み、コリコリと甘噛みするのだ。唇で柔らかさを楽しみながら、優しく首筋に手を回し、背中を撫であげていく。

「ぼくが、兄貴の代わりに慰めてあげる」

「それって……本気なの？」

かすかな沈黙を挟んだ言葉はどこかねつとりとして、青年の心の奥底を刺激する。

「う、嘘なんか言わないよ」

一瞬彼女の呼吸が止まり、喉が鳴ったようだった。いくばくかの沈黙のあとのかすかな溜め息。兄嫁の髪が首筋に触れ、ゾクリと背筋が震えた。

「本当かしら？ 信じて……いいのかな」

兄嫁の腕が背中から離れ、青年の身体をなぞるようにして下へ降りていく。その巧みな手つきにゾクゾクとしながらも細い首筋に顔を押しつけて髪の毛の香りを楽しむのだが、しなやかな手が腰の前部に至って身体を硬直させてしまった。

「ね、義姉さん……っ」

「だめよ。こういうときは、名前で呼んでくれなきゃ」

ドクン。心臓が大きく打った。彼女を名前で呼ぶ。それは彼が密かに思い描いていた夢のひとつだった。たった今、それが許されたのだ。

「涼香さん……」

「そうよ。私の旦那様の代わりに慰めてくれるんでしょ？」

うん、という言葉葉を思わず飲み込んでしまった。細く長い指が布地の上から彼の股間の凶暴な器官を包み込んだからだ。それだけで電気が流れたような快感が身体を走り抜け、小さな呻きが口から漏れる。

「もう元気なのね。真二君のココ……」

ふうっ、と耳に息を吐きかけながら、低めの声が耳孔をくすぐる。彼女を抱きしめていながらも、なんだか歯が立たないようなもどかしさを感じた。なんだか自分がひどい子供になってしまったような気がする。

「ご、ごめんなさい」

「謝ることなんかないわ。ここは大きくなって当然のところだものね」

かぶ、と耳たぶを口に含んだ彼女の唇があまりに柔らかくて、ピクンと大きく震えてしまった。その間にも人妻の手は秘めやかに動き、静かにズボンのホックを外し、

ファスナーを下ろしてしまっていた。

「そ、そこは……っ」

「私の旦那様の代わりができるかどうか、試してあげる」

優しいけれど、どこか粘液質なものを感じさせるねっとりとした声が異様に色っぽい。普段の元気な明るい声とはまるで違う、男の官能をあおる声だ。

「ほおら、立派じゃない。すっかり大きくなっているのね」

「それは、その……あっ」

言葉に詰まる青年のモノを、人妻は握ってしまった。下着から顔を出したペニスは憧れの女性の手の中でピンピンに固くなり、ズキズキと高まる欲望に疼いていた。

「嬉しいわ。そのままじつとしていてね、真二君」

ちゅっ、と頬に軽いキス。力の抜けた真二の腕の間からスルリと抜けた涼香は青年の身体をなぞりながら身体をかがめ、跪いた。

「ここ、気持ちよくしてあげる」

今まで見せたことのない濃艶な表情を見せる人妻は、ソファアに腰掛けたままの男の脚を開かせるとその間から若者を見上げた。

「すっ、涼香さん……。うっ、ううっ」

脚の間から見上げてくる兄嫁は、まるで別人のような色つぽさだ。シャツを脱いで薄いキヤミソールだけで雄の器官に手を添えたまま艶然と笑う様子は、やはり美しいと思つた。いつもの明るく元気な様子からは信じられない淫らな表情でも、やはり涼香は涼香なのだった。

「旦那様の代わりをしてくれるんだから、頼りがいあるとこ見せてね」

「わ、わかつたよ……」

兄嫁の突然の変貌ぶりに困惑しながらも頷くしかない。夢にまで見た女性の奉仕だ。それがたとえ禁断の行為だったとしても断れるはずもなかった。

「ふふふ。ピクピクしてるのね。ものすごく元気」

青年を見上げながら指で輪を作るようにして軽く肉茎をしごく、若者がかすかな呻きを漏らす。そんな義弟の表情を楽しんでいいのか、微笑みながらペニスへの愛撫を繰り返す。キメの細かい肌が触れるのがひどく気持ちいいのだ。

「うっ、うう……」

しなやかな指が裏スジをなぞり、カリのくびれをやわやわと握り締める。陰のうをも指で揉みほぐし、中のうずらの卵ほどの器官を優しくマッサージする。涼香に触れてもらっているというだけでも興奮ものなのに、彼女はやはり人妻であつて、そのテ

クニツクは青年が今まで経験してきた同世代の女とは違ったのだ。

(て……手コキだけなのに……すごくいいっ)

細やかな愛撫はその柔らかくもキメの細かい肌ともあいまって見る見るうちに男の器官の欲望と熱をかきたてていく。その心地よさがさらに欲望を生み、背筋を快樂のざわめきが駆け抜けていくのだった。

「気持ちいい？」

「す、すごく気持ちいい」

「うふっ。そう言ってもらうと張り合いがあるわ。チュッ」

一瞬だけ兄嫁の唇が触れると、その柔らかさが電撃的な快感となつて真二の身体を硬直させた。涼香にしてもらつているといふ感動もあつただろう。だが、それを抜きにしてもやはり彼女は上手だった。

敏感な亀頭粘膜をさすりながら、カリのくびれめを優しく締め上げるとビクビクとペニスが震えた。じゅわりと何かが染み出るような快感を感じる。

「若いのねー。もう欲しい、欲しいってヨダレを垂らしてるのね」

「それは……涼香さんが……」

「そうね。私がしているからよね……。可愛いっ」

すりすりと頬をすりよせてくると、腰の奥にせつないほどの快感がこみ上げてくる。滑らかな肌はもはや凶悪なほどの快感発生機になっていた。

いきり立ったペニスはもはや女のどんな愛撫にも敏感に反応して人妻を悦ばせる。先端から滲み出た粘液をピンク色の爪先で塗り広げられても、根元を指で挟まれてグリグリと刺激されても、ちよつとしたことで呻きが喉から漏れてしまう。

（すごい……涼香さん、上手いよっ……）

自分の荒い呼吸に気付いた瞬間、義姉が嬉しそうに自分を見上げていているのに気付いた。今までの表情を全て見られていたかと思うとひどく恥ずかしく、目をそらしてしまった。

「いいのよ、感じてくれるの、とつても嬉しいから」

これじゃあ、男と女があべこべだ。そう思ったが、兄嫁の目元がかすかに朱に染まっているのに気付いて生唾を飲み込んでしまった。彼女も感じているのだ。自分からも彼女を感じさせてあげたいと思うのだが、彼女の次の言葉に沈黙してしまいうしかなかった。

「それじゃあ、今度はお口でしてあげるわね」

涼香が、あの赤い唇で自分のものをくわえてくれる——。その想像は以前からの妄

想のひとつだった。それがついに実現する。そう思っただけで若いペニスは一際高くそそり立って人妻を驚かせるのだった。

「すごいな。とてもたくましいのね……んんっ」

男の股間にそそり立つモノを愛しそうに可愛がる表情は淫らというには美しすぎたかもしれない。今まで両の手で文字通り男根を可愛がってきた人妻の唇がついにペニスを口に含んだ瞬間、思わず声が出ってしまった。

「う……うわっ」

その柔らかさはマシユマロか、それともクリームか。とろけてしまいそうに柔らかい唇の向こうはねつとりと暖かい悦楽の園だった。潤沢な液体に満ちた口腔内には柔軟でありながら強靱な舌が待ち構えていて、敏感な龟头粘膜をザラつく表面で舐め上げると男の身体が震えた。

「んんっ……んふっ……ちゅぷっ……あふっ……」

女性から男性への愛撫としても珍しくないフェラチオだが、涼香のそれは今まで経験した女性のものとは比較にならない。バキューム感というのか、彼女の口全体が吸いつくようで、舌や口腔粘膜と密着した龟头粘膜が身震いしたくなるような快感を脳髓に送り込んでくる。

「きつ、気持ちいいよつ。涼香さんの口、気持ちいいつ」

「嬉しい……いつでも出しちゃっていいからね……んんっ」

すでに射精感が高まっていたが、このまま何もせずに射精してしまうのは男のプライドが許さない。手を伸ばして艶やかな髪を撫でてやるとビクンと兄嫁の身体が強ばった。彼女も感じているのだ。

腰の奥に甘い射精感がわだかまっていくのをこらえながら人妻のすんなりとした首筋や白い貝殻のように可憐な耳を指でなぞると、敏感な女体は可愛らしくも鼻を鳴らして応えるのだった。

うっとりとした表情のまま、自分の下半身に絡みついてくる兄嫁の手と指。サラサラとした綺麗な髪が太腿に触れるだけで快感が走る。

「んちゅうっ……んんふっ……あんんっ……」

指で竿をしごきながら、もう片方の手は睾丸を優しく包み込む。口唇愛撫といってもその手は一時も休んではいけない。時にはペニスを奥まで飲み込み唇が柔らかくも強靱な拘束具のように竿を締めつけたかと思うと、カリの裏までも丁寧な舐めてくれる。「ううっ……涼香さん、これじゃあ、ぼくはもうっ……」

「ん……いつでも出ひて……はうんッ……んん……いいって……言ったれしよ……」



ピチャピチャと淫らな音を立てながら人妻が追い上げにかかる。バキュームによって密着した口腔粘膜と舌がヌメヌメとした感触とともに感じやすい亀頭粘膜を包围して責めたてる。激しくなった動きとともに胸がユサユサと揺れて脚に触れるのがたまらなく気持ちいい。

ドクン、ドクン、ドクン――。

すでに心臓も呼吸もせつないほどに早い。青年の股間は文字通りはち切れそうなほどになっていた。ペニスから快感を搾り取るかのように竿をしごきたてる人妻の手が、唇が恐ろしいほどに気持ちいいのだった。

ビクン、ビクン、ビクン――。もう自分でも先走りの液体がジクジュクと漏れているのがわかる。それも強烈なバキュームの前に一瞬で吸い取られてしまっているが快感はそれ以上の速さで尿道を押し開き、雪崩を打ってペニスを走り抜けようとしていた。

「出ひて……んんっ、全部……飲んであげゆ……っ」

そう言って、唇と手の両方で激しい締めつけを繰り返しながら、上下運動を繰り返すと、ギリギリまで高まっていた射精感覚がつかいにあふれた。身体の奥のどこかでスイッチが入ったように青年の身体が硬直する。

「で……出るよつ、涼香さんの口で……うううつ」

ドクンツ、ドクドクドクツ！ ドピユツ、ドピユルルルツ——ツ！

一瞬のうちに極大値にまで達した性感が熱く固い肉竿を震わせ、青年の体内から熱くも濃厚な男のエキスを噴出する。熱く煮えたぎった欲望が弾け、スペルマは寧丸から輸精管、そして尿道を一瞬で通り抜けて鈴口に達し、激しい快感とともに体外に迸る。

ドクツ、ドピユツドピユツ、ビクビクビクツ！

激しい収縮を繰り返しながら、快感は尿道から、龟头粘膜から全身に染み込んでいく。あくまでも柔らかい女の口の中でヒクヒクと震えながら、たまりにたまった欲望の液体を放出しながらも女の肌を必死にさぐる。

「うつ、くう……っ」

キヤミソールの肩紐をずらして背中を愛撫しながら、幾度目かの呻きが口からこぼれる。兄嫁の口の中はどこまでも心地よく、下半身が溶けてしまいそうなほどだ。

コクコクツ。かすかな音が女の喉で響いた。飲んでいるのだ。憧れの女性が口で愛撫してくれたばかりか、溢れ出た欲望の液体を飲んでくれている。その感覚は文字通り身震いしたくなるほどの感動だった。

はあっ、はあっ、はっ、はあっ……。

二人の喘ぎが、熱い吐息がそれぞれの敏感な部分に吐きかけられ、感じやすい粘膜は空気の震えにすらもヒクヒクと震え、その性感の高まりはジユクジユクと熟れた果実のように蜜を染み出させるのだ。

「ぴちゃぴちゃっ……あっ……お尻なんか駄目なおっ……」

「だ、駄目なんはや……ないれしょっ……ちゅぷっ……」

指でちよんちよんとつついてやると、瞬間的にすぼまるアヌスがひどく可愛く、その度に激しく収縮して蜜を分泌する秘口が愛しい。そのくせ、舐めしやぶっていると柔らかくほぐれてきて、もう少しで指が入ってしまいそうだ。

「あひっ……ペロペロいいっ……もつと、いっぱい舐めへえっ」

ドクン、ドクン、ドクン——！

聞こえるはずもない自分の心臓の音が聞こえるような気がした。その脈動のひとつひとつがペニスからの快感を全身に送り出し、血流から肉悦が染み出している。

ちよつとした刺激で弾けてしまいそうな、焦燥感にも似た苦痛とも快感ともつかない感覚が膨れ上がる。腰がガクガクと震えてしまいそうだ。上になっている人妻はすでに力が入らなくなっているらしく、ガクガクと震えているほどだ。丸まってしまっ

た背中に白いシャツがまとわりついて、細い腰が震えているのが卑猥だった。

「くうっ。もう限界だよっ……で、出そうだっ」

「いひのよ、んんっ……来て、真ちゃんっ。わらひのお口にちようらいっ」

切羽つまった自分の言葉に返ってくるのは、恋い焦がれてきたあの女性の言葉。その赤い唇の奥までも男根をほおぼり、その舌がチロチロと亀頭冠を刺激する。唇が竿をしごき、指が根元に絡みついて締め上げる。ペニスの中心を貫く快感が腰椎に絡みつき、背筋から脳天に向けて肉の悦びを放出した。

「うっ、あっ、ああっ」

ビクン、ビクッ、ビクビクッ！

淫らな舌先が鈴口をいじった瞬間、ついに限界に達した快感が脳天まで噴き上げ、抑制の安全弁を吹き飛ばした。青年の全身に痙攣が走り、熱いマゲマが鋭い快感とともにペニスに充満し噴き上げるのだった。

「ううっ……出る、出るよ、涼香さんっ……ふああああっ」

ドクッ、ドクドクッ！ ビュルルルルルッ——ッ！

激しく脈動するペニスの先端が弾けそうなほどに膨張した次の瞬間、限界を超えた熱いスペルマが輸精管を駆け抜けて迸った。ドロドロに煮詰められた欲望の液体が快

感とともに内側から鈴口を押し開き、痙攣するペニスから女の喉奥へと流入する。

「んんっ！ んぐっ……んむむむっ……んくっんぐっ……」

何年もの間想いを寄せてきた女性の喉に精液を叩きつける快感は巨大な征服感を伴い青年の快楽中枢を揺さぶった。強ばった全身が悦楽の汗に濡れ、吐息すらも熱く激しい快感を嘯みしめるのだ。

ビクンッ、ビクンッ、ビクンッ——！！

脈動するペニスが断続的に快感を生む。下半身から背中までをとろかすような肉悦が一気に力が抜けてしまった雄の肉体へ染み込んでいく。その間もペニス全体を舐めつくそうというかのような熱心な口唇愛撫が続いているのだ。

「うっ、ううっ……」

ねっとりとした唇が、ザラつく舌が敏感な粘膜をこそげとるがごとくに激しく刺激してくると、腰から力が抜けそうなほどだった。そんな青年のペニスを愛しげにしゃぶり続けていた人妻が、チュツと音を立てて亀頭にキスをした。

コクコク、とかすかな音とともに彼女の喉が上下した。飲んでくれたのだ。魂が震えるような感動が青年の身体に満ち、この女性を恋人にしたのだという実感が改めて湧いてくる。

丁寧にペニスを拭き清めながら、奥に残った精液までも吸い出し、しごきだす仕草は愛情に満ち、若者の胸を暖かいもので満たしていく。

「んんふっ……ちゅっ。綺麗になったわよ。すっごく濃かった。嬉しいな」

いつの間にか力を失っていた男の腕を振りほどいた涼香が身体の位置を入れ替え、青年と並ぶようにしてベッドに身を沈めた。せっかく乾かしたはずの男物のシャツは再び汗に濡れて涼香の身体に張り付いていた。それが自分のものだと思うとそれだけで頭に血が上ってしまう。

「……ああ……ん。とつてもよかったわ、真ちゃん」

男の精を飲み干した女は淫らに微笑みながら手の甲で口元を拭う。その様子はなおもいやらしくも魅力的で、身体の奥にズンと響くものを感じる。まだ二人とも息が荒いけれど、青年は心地よいけだるさの中で彼女とともにいる幸福を噛みしめる。

彼女は全部飲んでくれたのだ。それも、嬉しそうに、熱心に。丁寧に、そして優しく――。人妻の情の深さを感じながら頬に触れて優しく撫でてあげると、彼女も同じことを返してくれる。

「ぼくも、すごくよかった……」

「うふふっ。とても元気だったわね。真ちゃんのここ」

彼女に触れると、それだけで快感が走る。思わず呻く義弟を愛しげに見つめる人妻の手は、射精直後でありながら早くも回復しつつある。ペニスを優しくマッサージを繰り返すのだった。

「そ、そんなに触ったら、また……」

「くすくすっ。また元気になっちゃうのよね、若いなあ」

焦る若者に淫靡な笑顔を向けながらも、絶頂に達して敏感なままの男性器が兄嫁の手の中で大きくなっていく。困惑する青年の表情を楽しんでいるのか涼香は身体を押しつけながら笑うのだった。

「まだ、できるわよね」

ふうつと、耳に息を吹きかけられた。ゾクリと身体を震わせる青年の耳たぶをかぶり甘噛みしながらちよつとハスキーな声で囁きかけてくる。

「旦那様の代わりに……私を満足させてくれるのよね、真ちゃん？」

「う、うん……」

艶やかな唇はなおも赤い。間近に迫った女性の細い顎が色っぽいと思った。若者が射精直後のけだるさから抜けきれないうちに女の身体は再びぴつとりと寄り添ってきて、柔らかくも熱い柔媚な感触が肌をざわめかせるのだ。

お互いの髪に顔を埋め、耳を、頬を、首筋を愛撫しあいながら二人は絡み合う。たっぷりとした乳房が体重でつぶれ、若者の胸板に密着する。形を変えながらも豊満で甘美な肉塊は男の快感中枢を激しく刺激した。

「す、すごい……涼香さんの身体、気持ちいいよ」

「ありがとう、真ちゃん。でも……私はまだイッてないの。もう一度お願い」

ちゅつと頬で音がした。ショートカットのきりつとした顔立ちを淫らに染めて兄嫁がおねだりする。いつも優しくソツのない人妻の他人に見せることのない秘密の顔だ。夫に甘え、おねだりする可愛らしくも淫らな表情が彼女の整った顔立ちをさらに誘惑的に彩っているのだった。

「ぼ、ぼくも……したい。涼香さんとなら……何回でも……」

それは本心だった。彼女とならば、一晩に何回でもできそうな気がする。何年も前から焦がれてきた女性と、夫の代理とはいえペッドをともにしているのだ。兄と一緒に可愛がつてくれた彼女に、昔から思慕を抱いてきた真二だった。

「嬉しいな。ここなら邪魔は入らないから……もう一度、しよつ」

そう。ここならばどこからも邪魔は入らない。涼香のご近所の人々も、青年自身の両親も呼び鈴を押すことはないのだ。そう思い当たった若者の股間に一気に血液が流

入した。海綿体が充血し、急速に体積を増していく。

「今日は私がしてあげるから……じつとしていいのよ」

身体を入れ替えた人妻が青年の胸に指を這わせる。ちっぽけな乳首をつまみ、クリクリと転がしながら、もう一方の胸に吸いつく。余った手は下半身に伸びて股間の強ばった肉塊をやわやわと愛撫し続けていた。

「す、涼香さん……そんなの……ダメだよっ」

ちゅっちゅっつとわざと音を立てて乳首を吸うのがいやらしい。先ほど目覚めさせられた新たな感覚が若者の中で見る見るうちに大きくなっていく。

「うふふっ。敏感なんだ、真ちゃんつたら……」

女から男への逆三箇所責めだ。男からはよく聞くが、女からというのは初めてだった。身体の奥から快感を引きずり出されるような奇妙な悦楽と全身を貫く快楽とがミックスされ、全身を熱く火照らせる。

「もう十分元気になったわね……そのまま置いてね、真ちゃん」

ねっとりと絡みつくような艶っぽさだった。低めの声はあくまでも優しくいくせに、微妙な震えがやけに色っぽいのだった。敏感になってる青年の脇腹を優しく撫でながら身体を起こした女のシルエットは淫らな絵のようだった。

「真ちゃんは何もしなくていいのよ。ただ感じてくれれば……」

若い男の腰の上に馬乗りになった人妻がせつない吐息混じりの声で囁く。下から見上げる年上の女性はあくまでも美しく、柔らかな室内灯の明かりに浮かび上がる女体は塑像のようですらあった。その彫刻のごとく整った肢体は見上げる状態だとポリウムが強調され、凶悪なほどの質感にドキドキさせられる。

「いくわよ……うんっ」

熱くそそり立つ男根に指を添えた手が、磨かれた大理石のごとき太腿の間でピクンと震えた。入り口で感じているのだ。かすかな女の呻きすらも甘く、扉を押し分けて侵入する男の快感をいやがうえにも高めるのだ。

ズプッ！　ズプズプズプウウ——ツッ！

美女が体重をかけるのにしたがって一気に肉裂をかき分けて潜りこんでいくペニス先端はうねりながら締めつけてくる膣内粘膜にこすりたてられ、全身をとろかすような快感を送り込んでくる。

「くはあっ……す、すごいよっ、涼香さん」

「とつても、とつても固くて熱いの……真ちゃんがあ……ふああっ」

彼女の中は熱く、狭く、そして柔らかい。中に満ち満ちた熱い蜜が割れ目からジュ

クジユクと流れ出し、お互いの繊毛が絡み合うところに滴り汚していく。

「ああっ……わたしの中、真ちゃんのでいっぱいになっちゃう……」

彼女が腰を動かす度に、ピチャピチャと音がする。はしたない水音が最も敏感なところから聞こえるのだ。恥ずかしいと呟きながらも、兄嫁の動きは止まらない。

青年のお腹から胸にかけての肌の手で愛撫しながらも女は喘ぎ、そして悶える。ペニスは彼女の動きとともにより深く突き刺さり、艶やかな唇から途切れ途切れの喘ぎ声を引き出していく。

「はあっ、はあっ……あっ……くふう……ああんっ」

女の動きに連れてユサユサと乳房が揺れる。下からの眺めに強調された豊かな膨らみはまるでお碗をかぶせたかのような整った形をしていて、見るからに柔らかそうなのだ。思わず触れたくなってしまう。

「あ……」

思わず声が出ていた。先ほどは涼香を舐めまわすのに夢中で気付かなかったが、壁面に大きな鏡が備えられている。ちょうどベッドを見渡せるように。そこでは下から見上げるだけではない、横からの彼女の姿がしっかりと映っていた。

（すごい……あんなに腰が反り返って……）



吐息とともに揺れるのは乳房だけではない。滑らかな肌がうねり、細くくびれた腰からお尻までもが波打つように揺れる。ショートの髪から覗くうなじのあたりもひどく色っぽく、見上げているだけで興奮してしまう。

はあっ、はあっ、はあっ——。

女の手を掴み、それを遡るようにして魅惑的な丘陵へとたどりつく。そのふもとに小指を添え、ほかの指で緩やかに揉みしだくと人妻の身体が腰の動きに加えて乳房を刺激される快楽でヒクヒクと痙攣した。熱い肉汁に満ちた豊潤な肉壺の中がキュンキュンと締めつけ、青年自身が呻き声をあげるほどだ。

「涼香さんのが……絡みついてくるよ。すごい気持ちいい」

「真ちゃんのが、ビクビクしてるっ。すごく……いいのっ」

お互いの言葉にさらに興奮を引き出されながら二人は動く。蜜壺の奥をかき回せばかき回すほどに内側からは熱い滑りがあふれ、熱く張りつめたペニスを心地よく締めつけてくる。入り口と奥の二段締めが竿と龟头を同時に刺激してくるのが、腰が痺れてしまいそうに気持ちがいい。

「ねえ、涼香さん……あれ、見て」

若者が指さした壁面に視線をやった兄嫁の目が大きく見開かれた。それと同時に二

段締めめの際奥がクンツと大きく締めつけて若い男を呻かせる。

「やだっ、鏡なんて……恥ずかしいっ」

羞恥に悶える兄嫁の乳房はふもとのくびれめすらも美しく、たとえようもない貴重さを感じさせた。柔らかくも心地よいその半球は指の動きに連れ刻々と形を変え、尖りきった頂上の突起を刺激するとその度に女体に軽い痙攣が走る。

「んんっ……あっ……ああっ……はっ、恥ずかしいのに、はあっはあっ……」

快感の高まりとともに艶かしい嬌声がせつなく、苦しげになっていく。青年の呼吸も脈拍もすでに限界まで高まり、ぐんぐんと上がる快感の水位に恐れを感じるほどだ。自制と男のプライドを守るべく、下半身に力を込めて耐えるのみだ。

（まだだ……まだ……涼香さんと一緒に……）

ドクン、ドクン、ドクンツ——！ 全身の血管が拡張され、驚くほどの流量の血液が心臓から全身に送り出されていた。快感を貪り、男の全てのエネルギーを目の前の美女の奥の奥に、柔らかい肉を貫いた先に放出したいと全身の細胞のひとつひとつが叫んでいた。もつと、もつと奥へ、もつと柔らかく、濡れそぼった暗く湿った場所へ向かおうと身体中が痙攣しながら反応していた。

下から見上げる姿と、鏡からの側面の姿。どちらにも美しい曲線を描く身体が揺れ

悶えている光景はいやがうえにも興奮を高めていた。

「真ちゃん……私もう……はうっ……せつないの……あっあああ……」

美女の動きが変化していた。上下の動きに加えて前後左右のグラインドが加わり、火照った肌は玉のような汗で飾られている。いよいよ高まった肉の悦びが女の自制を突き破ろうとしているのだ。すでにその内部は大量の蜜にあふれ、断続的に締めつける粘膜はペニスをリング状に締めつけてくる。

「ねえっ、来てっ！ 真ちゃんのが、ああっ、熱いのが欲しいのっ」

男根の先端に触れるのは子宮口だろうか。女の最も奥の聖域を突き上げながら若者の官能も昂り、脳髓を揺さぶられる悦楽に耐えるのに必死な状態だ。下半身全体に力を込めて腰を突き出し、同時に女の胸を愛撫していた手で先端の敏感な突起を痛いほどに力を込めてつまんで転がす。

又チャツ、又チュツ、ズチュツ——。

若者の下腹部に押しつける女の腰の動きが激しくなり、鏡の中の悶えも最高潮に達しつつあった。彼女の動きの全てを目に焼き付けながら真二も動く。

「ひっ……くあっ……ああっ、イクツ。真ちゃんも、真ちゃんも来てえっ」

ヒクヒクと収縮を繰り返す膣内粘膜が一際強い収縮をみせ、突き上げる肉茎の根元

を急激に刺激した。快樂中枢を直撃する刺激が、龜頭全体を締めつけてくる奥の刺激によってさらに増幅され、若者の射精機能を爆發させる。

「ああっあっ……ビクビクしてるっ……イクッ、イツちゃうううううっ——っ」

ドクンッ、ビクビクビクビクッ、ドバアアアア——ッ！

下半身全体が甘い泥濘に包まれる中、鋭い快感が背筋を駆けのぼり快感中枢を貫いた。体内の奥深くから噴出する欲望がマグマのように噴き上げ、男根は火山となった女の体内に放出するのだ。

ドクンッ、ドクドクッ、ドピュルルルッ！

大きく反り返った女の胸が弾むように大きく揺れた。ビクビクと痙攣を繰り返すペニスはその痙攣のひとつごとくに熱い精液を迸らせる。男根の脈動に絡みつく女肉はなおもキチキチに締めつけ、男の精を搾り取ろうとするのだった。

「真ちゃんっ……すぐくっ、すぐくっ熱いのっ……あんっ」

熱いスペルマを胎内深くに注がれる快感に身を震わせる美女の身体から力が抜けていた。胸を揉み上げる腕を細い指がさぐるような動きをするが、そのまま崩れ落ちる。痙攣する男のモノを深く飲み込んだまま、熱く柔媚な女体は男の胸板の上で激しくも荒い呼吸を繰り返し、なおも残る快感に身体を揺さぶるのだった。

ドクン、ドクン、ドクン——！

全身が泥になつたかのような脱力感と甘い快感にとろけた欲望がミックスされ、トロトロになるまで煮込まれたシチューのようだ。

欲望を放出しながらも倒れ込んできた涼香の身体を抱きしめると、尽きることのないたぎりを感じた。射精直後にもかかわらず柔らかくなりきらない男根はなおも硬度を維持し、熱い血潮はさらなる欲望を全身に巡らせている。

「あん……まだ元気なのね……すごく、頼もしいの……」

汗と汗以外のぬめりに全身を濡らした二人はお互いの体温を感じながら身体を重ねる。それはもはや恋人の姿以外には見えなかった。目の前に抱きしめる姿と、鏡に映る二人の姿の二つも、ともにぴつとりと寄り添っていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!